

パーティーにおける生と死

——ヴァージニア・ウルフと
キャサリン・マンスフィールドの作品から——

石川 玲子

1. はじめに

縁あって奈良学園セミナーハウス、志賀直哉旧居での講座「高畑サロン、ふたたび」でお話しをさせていただく機会を得た。現在ある、和と洋が溶け合うしっとりとしたたずまいの家屋は、志賀直哉自らの設計により昭和の初めに造られた家を復元したものであることを初めて知った。この建物のサンルームに集ったといわれる多くの文人や芸術家たちの姿を想像すると、私に関心を持つ20世紀初頭から戦間期にかけて文筆活動を行った作家ヴァージニア・ウルフとその兄、姉、弟のもとに集った若き芸術家や知識人の姿（ウルフたちの住まいがロンドンのブルームズベリー

にあったことから、彼らはブルームズベリー・グループと呼ばれる）が重なって見えてくる。ブルームズベリー・グループの集まりが、彼らの心酔していたG・E・ムアが説いた「美しい事物と人間関係の重要性」(“the importance of beautiful objects and personal relations”)¹⁾の実践であった(MacLoughlin 10) ことを思えばなおさらである。さらには、ヴァージニア・ウルフと志賀直哉がたった一歳違いであったことを思うと一層感慨も増す。

『志賀直哉旧居の復元』において呉谷充利氏は、旧居の復元作業の中で発見された二つの子供部屋の間の窓を「直哉の窓」と呼び、この「直哉の窓」と子供の勉強部屋の内部の様子をうかがうことのできる「床格子」について、

「遮断されるのでもなく開放されるのでもないちようどそのあいだにある微妙な間まの世界をかれはみごとに捉えている。要するに孤立的ではないお互いの情感的通路というべきものを直哉は何気ないかたちで保とうとしているように見える。」(呉谷19)と述べている。呉谷氏によると、それらは「自我と他我を分かつ……個人主義」を超えるものであり、「東洋的な寸刻の間が西洋的の二元論に見るような断絶をつなぐものとされるが(呉谷28)、ウルフとの関連で考えてもこれはとても興味深い指摘である。

ウルフは小説の他に多くの著作を残したが、とりわけ長編エッセイ『自分だけの部屋 (A Room of One's Own)』(1929)や『三ギニー (Three Guineas)』(1938)により、彼女はフェミニズムの先駆者として位置付けられてもいる。その『自分だけの部屋』で、ウルフは女性の自立のためには自分だけの部屋と十分な収入が必要であるというテーゼを提示し、女性の精神的自立と経済的自立の重要性を訴えた。これが示すように、精神の独立すなわち自我を意味する「部屋」はウルフにとって重要な意味を持つが、他者との交流のための部屋、パーティの空間もまた、ウルフにとつては大切なモチーフであった。「西洋的の二三

論」が西洋の男性中心的な考え方の根底にあるとするならば、ウルフはそうした考え方をずらすように、自己の世界と他者との交流の世界との間(あわい)をより自由に行き来する女性たちの姿を描きだしているようにも思う。ウルフが描いたヒロインたち、例えばクラリッサ・ダロウェイやラムゼイ夫人は、まさにそのような女性たちである。彼女たちの生き方が志賀直哉の精神性、「東洋的な寸刻の間」に通じるかどうか、志賀直哉の生き方や文学について知識のない私には論じることができないが、どこかでつながっているとすれば面白いと思う。

本稿では、モダニズム時代のイギリス女性作家、ヴァージニア・ウルフとキャサリン・マンスフィールドの描いたパーティを取り上げ、その一側面に光を当てたい。まずウルフの『ダロウェイ夫人 (Mrs Dalloway)』(1925)のパーティにおける「生と死」というモチーフについて論じ、それとの関連性を念頭に置きつつ、同じくウルフの『灯台へ (To the Lighthouse)』(1927)のパーティと、マンスフィールドの「園遊会 ("The Garden Party")」(1921)について考える。

2. クラリッサ・ダロウエイのパーティ

—生と死

ヴァージニア・ウルフの『ダロウエイ夫人』は、国会議員の妻クラリッサ・ダロウエイ（ダロウエイ夫人）がある朝、その日のパーティのための花を買いに出かけるところから、パーティが終盤に差し掛かった夜更け過ぎまでを描いた作品である。ウルフはたった一日の出来事を描きながらも、クラリッサや彼女を取り巻く人々の意識を通して、彼らの過去と現在、そして未来への思いまでも描き出す。そこには様々なテーマを見出すことができるが、この作品がパーティの話題に始まりパーティに終わる、ということからもわかるように、パーティはこの作品全体を大きく束ねるモチーフになっている。

実は、ウルフはこの作品の執筆中、並行して、パーティをモチーフとした短編小説をいくつか書いている。それらは、Stella McNichol により編纂されて、ひとまとまりの短編小説群として *Mrs Dalloway's Party* というタイトルのもと1978年に Hogarth Press から出版されている。McNichol が “Introduction” で述べているように、そこに収

められた7つの短編は、ウルフがパーティについて『ダロウエイ夫人』で描ききれなかったものの、その小説からこぼれ、はみ出したものを描いている。紙面の関係上、これらの短編についての考察は別の機会に譲るとして、少なくともウルフが「パーティという特別な社交の機会に対する強い関心」(McNichol 9) を持っていたことは、これらのパーティを描く短編小説群の存在からもはっきりとわかるのである。

小説の中で、クラリッサは旧友であり求婚者でもあったピーターと夫リチャードが、それぞれ彼女のパーティに対する情熱に理解のない言葉を発したことを思い返しながら、心の中で「自分がパーティを開く意味」を次のように説明する。

わたしが求めているのはただ人生だけなのだから。

「わたしがパーティをひらくのはそのためなの。」と彼女は声に出して人生に話しかけた。

……(中略)……

……でもピーターがわたしに「なるほど、だけどあなたのパーティ——あなたのパーティの意味はなん

「なんです？」と尋ねるとしよう。わたしはこう言えるだけだ。(誰にも理解してもらえないと思うけれど。) それは捧げものです、と。

でも他人が何と言おうと・・・、そんな次元よりさらに自分の心の奥深くにもぐってみるならば、わたしにとってどういう意味を持っているのだろうか、わたしが人生と呼ぶこのものは？ああ、それはじつに奇妙なものだ。誰それがサウス・ケンジントンにいる。べつの誰かがベイズウォーターにいる。またべつの誰かがたとえばメイフェアにいる。わたしはたえずその人たちの存在を意識し続けている。そしてなんてむだなことか、なんて残念なことかと感じる。その人たちと一緒に集められたらどんなに素晴らしいだろう。だからわたしは実行に移すのだ。それは捧げものなのだ。人々をむすびあわせ、そこから何かを作り出すってことは。でも誰に対する捧げものなのだろう？

恐らく捧げものための捧げものだ。とにかくそれが私の天賦の才能だ。

(MID 108-9)⁽³⁾

人の意識というものは脈絡なく流れ、論理の枠組みを自在にすり抜ける。クラリッサの意識の中で説明されるパティの意味は、捉えられそうで捉えられないあいまいさを含んでいるが、少なくともパティは彼女の中で人生というものとして深く結びついていることがわかる。さらに、パティは人と人を結び合わせてなにかを作り出すことであり、また「捧げものための捧げもの」(“An offering for the sake of offering”)(109) でもある。

では、クラリッサにとって人生とはいかなるものなのであろうか。彼女は早朝のロンドンの街を歩きながら、人生への愛着、喜びを感じている。

わたしたちはなんて愚かなのだろうか、とヴィクトリア・ストリートを横切りながら彼女は思った。誰ひとり知らないのだから。なぜ人がこれほど人生を愛するのかわ、どれほど人生をながめ、つくりあげ、自分の周りに築いては取り崩し、一瞬一瞬また新たに創造しなおしているのかを。(中略) 誰もが人生を愛しているのだ。(6)

このように、クラリッサは通りの真ん中で、抑えがたい人生への愛を実感している。上の引用箇所が続いて、彼女は、目に映る様々なもの、街の賑わいを一つ一つ挙げ連ねて、「このすべての中に私の愛するものがある。人生、ロンドン、六月のこの瞬間がある。」と言うのである。このことから、ロンドンの街の活気がクラリッサの中で生の実感と愛着につながっていることがわかる。上の引用中、「つくりあげる」「創造する」というイメージが人生と結びつけられて、パーティについての先の引用の「何かを作り出す」ことと重なりあう点も注目に値する。

さて、クラリッサにとってロンドンの街が生の実感とそれへの愛着を喚起するものであることは上に見た通りだが、一方、同じロンドンの通りで彼女が孤独と死を思う瞬間もある。クラリッサはロンドンの往来で「タクシーをながめていると、自分が外に、岸から遠く離れてひとりぼっちで沖にいるという、そんな感じにたえず襲われ」「一日だって生きていくのは、ほんとうに、とても危険なことだ」と感じるのである(⑤)。このような思いは、やがて「死」についての思索につながり、その後、彼女の心を捉えるのは、本屋の店先に展示された本の「もはや恐れる

な、灼熱の太陽を／激しい冬の嵐を」という一節である。これはシェイクスピアの戯曲『シンペリン』の中の死者を悼む鎮魂歌の一部であり、そこには人生の辛苦からの解放としての死が暗示されている。それ故、この一節は彼女に戦争がもたらした多くの死と悲しみを思い出させるのである。これらのことが示すように、クラリッサは心の奥に、人生への愛着と死の意識を、一枚のコインの表裏のようにあわせ持っているのである。

病みあがりの身体と52歳という人生の折り返し点を過ぎた年齢が、彼女に死を意識させる一因であるが、戦争の記憶もまた彼女の死の意識の要因となっている。この作品の舞台は第一次世界大戦後の一日であり、作品には通奏底音のように、多くの若い命を奪った大戦の記憶、死の意識が、クラリッサの死の意識と重なるように響いている。

では、こうした生と死の意識は、クラリッサのパーティとどのように結びつくのであろうか。クラリッサが宝飾店の前を通り過ぎながら、その夜のパーティについて思うときの、次の言葉に注目したい。「わたしもまた、今晚灯りをともし、闇を照らす。パーティを開くのだ。」(⑥) この「闇を照らす光」パーティ」というイメージは、Christopher

Ames の次の指摘を念頭に考えると興味深い。Ames は七
八世紀のイギリスの修道士 Bede の著作を引用し、そこ
に用いられた比喩から、西洋文学における祝祭やパーティ
の持つ「構造的力学」を説明している。(Ames 1) すなわ
ち、Ames によると、西洋文学における人々の集まりや社
交の光と温かさは、外の暗闇を孤独と死のイメージに変貌
させる。そして、それにより祝祭や社交は、死に対峙する
生の賛美のシンボルとなるのである。このように考える
と、6月の朝の明るい陽光の中で、クラリッサがその夜の
パーティを思うことにも、同様の意味を見出せそうであ
る。つまり、昼間の陽光と喧騒は、クラリッサにとって、
死を孕む生そのものであるが、陽光の代わりに人工の光に
よって夜の闇を照らす空間、人々の交流によってにぎわう
パーティの空間もまた、彼女にとって生を表象するものな
のである。もしそうであれば、そのパーティは、ホステス
である彼女自身が作り上げる人生の賛歌であり、死への挑
戦であることができる。

実際、クラリッサのパーティは生と死の対立という視点
から読むことが可能である。まず、パーティが始まった直
後、絶望的な気分で、このパーティは失敗に終わるだろう

と感じたクラリッサが、あることがきっかけとなって、パ
ーティがうまく運び始めたことを直感する場面を見てみた
い。

極楽鳥の群れが飛翔しているカーテンがまた風をうけ
て膨らんだ。クラリッサは見た——レイフ・ライオン
がカーテンを叩くように押し返し、そして話し続ける
のを。結局、失敗じゃない！うまく運んでいる、わた
しのパーティは。はじまった。動き出した。まだかる
うじて成功している程度だけ。(15)

レイフ・ライオンなる人物が登場するのはこの場面
だけであり、彼が何者かさえ、読者は知らない。なぜクラ
リッサは、「レイフ・ライオンがカーテンを叩くように押
し返し」「話し続ける」のを見て、パーティの成功を確信
したのでろうか？これについての Ames の二つの解釈は非
常に示唆的である。まず文字通り考えるならば、風に膨ら
むカーテンを叩きながら、レイフ・ライオンが会話を続け
たことは、彼がもはや周りの環境に注意を払っていないこ
とを示し、彼の気持ちがいかにパーティの会話に入り込ん

でいるかを示すものである。つまり、パーティの客たちが打ち解け合い、会話を楽しんでいることを示す印として、クラリッサはその行為を捉えたと考えることができる。次にその行為の象徴性に着目するならば、カーテンの向こうの闇、そして闇の世界から室内に入り込もうとする風は「孤独」「死」を表し、明るく照らされた室内と、そこに現出する人々の交流こそ、「生」あるいは「生の賛美」を象徴する。従って、カーテンを叩き押し返すという行為は、死に対する生の勝利を暗示し、このパーティの成功を表しているということになる。(Anes 95)

さて、こうして軌道に乗ったクラリッサのパーティは、終盤も近づいたころ、生と死の対立という構図を顕著な形で露呈することになる。クラリッサは客の一人である精神科医の夫人から、患者である青年が自殺をしたという話を聞かされる。クラリッサは衝撃を受けて、次のように言うのである。「ああー私のパーティの真つただ中に、死がいりこんできました。」(162)。ここには「生」の象徴としてのパーティと、そこに突如放り込まれた「死」という構図を見ることができる。

クラリッサはこの衝撃によって、広間から隣の小部屋に

退くが、賑やかな広間に対して彼女が一人でこもる小部屋は死を象徴する。この小部屋で、彼女は青年の死を追体験し、死を選んだ青年の心を理解するのである。彼女は日常生活に隠された欺瞞、人との交流の不可能を思い、「死は挑戦だ」「死はコミュニケーションの試みだ」「死には抱擁がある」と言う(163)。このように死に大きく引き寄せられたクラリッサを、ふたたび生の世界へと引き戻したのは、小部屋の窓越しに見える、向いの部屋で静かに寝支度をする老婦人の姿だった。ひとりで淡々と自分の生活を守っている老婦人の姿は、孤独と死に向き合いながら生きる人間の崇高さを表している。その姿を目にして、クラリッサは生きる勇気を回復したに違いない。この時「もはや恐れれるな、灼熱の太陽を」という一節がふたたびクラリッサの意識に上る。すでにみたように、これは死者のための鎮魂歌の一節であるが、実は『シンベリン』の劇中、鎮魂歌を送られた王女イモージェンは、やがて薬による仮死からめざめ、生き返る。そのことを念頭に置けば、この一節は生きる勇気を鼓舞するものとも読めるであろう。この後、クラリッサは、王女イモージェンと同様、死からふたたびよみがえるように、小部屋を出て広間へと戻っていく。

もつとも、広間で繰り広げられるパーティーは、クラリッサが目にした老婦人の孤独でつましい生活とは、ある意味で対照的である。どちらも生を象徴するものではあるが、老婦人の生活が地道な生の営みを表すのに対して、クラリッサのパーティーは、すでにみたように、そのような生の営みの中で特別に作り上げられる生の賛美を表象するからである。広間に戻ったクラリッサの姿がピーターの目を通して描き出される。「クラリッサだ、と彼は言った。そこに彼女がいたのだった。」(172)、この作品最後の二文は、ふたたびホステスとしての存在感と生の輝きを身にまとったクラリッサの姿を、読者に強く印象づけるのである。

死のモチーフは、古くからパーティーのシーンと結びつけて描かれてきたが、それはモダニスト小説の中で顕著である。Kate McLoughlin は、紀元1世紀ローマの文筆家ペトロニウス(Petronius)による小説『サテュリコン(The Satyricon)』の中の「トリマルキオの饗宴」における不節制と死についての説明から、モダニスト小説のパーティーにおいて繰り返し描かれる「死」のモチーフへと議論を写している(McLoughlin 14-15)。Amesも同じくモダニスト小説のパーティーと死の関わりを論じており、パーティーと死とい

うテーマがモダニズムの時代の問題意識に通じるものであることがわかる。ウルフは『ダロウェイ夫人』の構想を練っていた1923年6月の日記に「私は生と死、正常と狂気を書きたい。」と記したが(*The Diary of Virginia Woolf* vol.2, 248)、その背景に、個人の経験を超えた時代の精神が反映されていたことは確かであろう。

3. ラムゼイ夫人のディナー・パーティー —心の交流

『ダロウェイ夫人』に続く『灯台へ』では、ロンドンから遠く離れた避暑地の別荘の小さなディナー・パーティーが描かれる。小説は三章からなり、ディナー・パーティーが描かれるのは第一章の終盤である。たくさんのゲストが広間に集まるダロウェイ夫人のパーティーとは違い、そのディナー・パーティーはラムゼイ家の家族―夫婦とすでに就寝している幼い二人を除いた四人の子供たち―と六人の客がテーブルを囲んでいる。Immanuel Kant は、理想的なパーティーの人数について、イギリスの社交家として知られるChesterfieldの「美の女神の数より少なからず、かつ芸術の女神たちの数よりも多からずあるべし」(招待主を除く

という Kant の注あり) という言葉を引き、会話が小さなグループに分かれることなく、そこに在る皆に共有されるように、招待主を含め四人から十人がテーブルにつくのが良いと述べているが (Kant 179)、ラムゼイ夫人のパーティは、Kant の理想的なパーティの人数に近いといつてよい。Kant はまた、成功したパーティの例として Plato の饗宴に言及し、ある客が言ったという「君のところの御馳走がうれしいのは、食事を味わっている時にそうだというだけではなくて、あとでしばしば楽しく思い出されるからなんだ」という言葉を紹介している (Kant 179) が、ラムゼイ夫人はディナー・パーティの後で、その成功を確信しながら「きつと皆は」「どんなに長生きしようと今晚のことを思い出すだろう」と考えている (PLH 104)。⁶⁾

しかし、クラリッサ・ダロウエイがパーティは失敗だと感じたように、ラムゼイ夫人も最初、参会者の心がみなバラバラだと感じている。そして、クラリッサが人々を結び合わせ、なにかを創り出すことを自分の天賦の才能と自任したように、ラムゼイ夫人も「溶け合わせ、流れを生み、なにかを創り出す努力」は全て自分にかかっていると、心を奮い立たせる (90)。ラムゼイ夫人のパーティにおいて、

クラリッサのパーティでのレイフ・ライオンがカーテンを叩くシーンに相当するのは、夫人の指示で部屋の蠟燭がともされる場面である。

今やすべての蠟燭に火がともされると、テーブルの両側に並んだ顔が、その灯りのせいで近づいたように感じられ、夕暮れの光の中にいた時と違って、テーブルを囲む人々の間にある種の一体感が生まれた。というのも夜は窓ガラスの向こうに締め出されるとともに、その窓は外の世界を正確に映し出すというより、ゆらゆらと不思議に波立つような雰囲気を描き出していたからだ。そのため、まるで部屋の中には秩序と乾いた土地があるのに、一歩外に出れば、すべてのものが水の流れのように、揺らめき、たゆたっては、消えていく影の世界があるかようだった。(90-91)

前節で見た、光の灯された部屋と外界の対立という構図を、ここにも見ることができる。ここでは、窓ガラスの向こう側の夜は、「水の流れのように、揺らめき、たゆたっては消えていく影の世界」とされ、部屋の中の「秩序と乾

いた土地」と対比されて、混沌、無秩序、さらには冥府をも連想させる。上の引用に続く「みんな揃って小さな孤島の洞窟で身を寄せ合い」外界の危険に抵抗するという比喻にも、「死」と対峙する「生」という構図が透けて見えてくる。

こうして始まった、ラムゼイ夫人のパーティにおける参会者の心の交流は、その日のメイン料理である牛肉の煮込み料理（*Boeuf en Daube*）の見事な出来ばえによって、クライマックスを迎える。運ばれてきた茶色の陶器の鍋から立ち上る芳醇な香り、三日かけて煮込まれた肉の深い色合いが描写され、この日の主賓バンクス氏の「見事な出来ばえです」（93）という称賛に「祖母譲りのフランス料理です」と応じる夫人の声には「歓喜の響き」がこもっている。そして夫人は嬉々として、他の人たちとの談笑に興じる。

先に言及した *Kait* も、社交における食事を人々の交流を促進するものと捉えているが、山崎正和氏が『社交する人間』の中で述べた社交と食事に関する次の一節は、とりわけラムゼイ夫人のパーティに見事に当てはまる。

さらに食事はあらゆる享楽のなかでも、一定時間のなかで満足が頂点まで高まり、やがて終息する経過の構造が最も明確な営みだといえる。その高揚感と宴席で人びとが互いの満足を確認しあい、喜びを表現しあうことによってさらに増幅される。そしてこのことは、おのずから食事の時間を一つの完結した時間として、日常の倦怠、灰色の繰り返しからはっきりと聖別してくれる。いわば食卓では社交の一つの条件というべき弓なりの緊張の持続、始めと中と終わりのある劇的な時間が半ば自動的につくられる。（山崎¹⁴⁴）

この指摘のように、ラムゼイ夫人のパーティにおいて、メイン料理の深い味わいがまさに参会者の満足と高揚感を生み出している。料理の出来ばえについてのバンクス氏の満足の表明は夫人の喜びを増幅して、場の雰囲気盛り上げらる。夫人は其中で、喜びが全身を満たすのを感じながら、「その喜びの気は、今ここで食事をしている人たちすべて——夫、子どもたち、それに友人たちから湧き立ったもの」であり、「その気は皆を包んで、確実にそこにある」、そしてそれは「どこか永遠を思わせるものだ」と

思う(97)。皆の心が一つになって溶け合う瞬間が作り上げられたことが、このようなラムゼイ夫人の意識を通して示される。しかも、鍋をのぞき込み、柔らかな肉をもう一切れバンクス氏に取り分けるといふ夫人の動作が、夫人の意識の流れの中に差し挟まれることで、その喜びの瞬間を創り出したのがまさに見事な味わいのメイン料理であったことが暗示されている。

ラムゼイ夫人のパーティには、ダロウエイ夫人のパーティとは異なり、表立った「死」についての言及はないものの、「日常の倦怠、灰色の繰り返し」から「聖別」されたそのパーティ空間は、まさに非日常化された「生」の結晶であったはずである。それが、夫人の言うように「永遠を思わせ」、参会者の記憶の中で彼女の死後も生き続けるとすれば、それは「死」に対する「生」の勝利を意味すると言つてよい。

翻つて考えるなら、このような理想的なラムゼイ夫人のパーティに対して、クラリツサ・ダロウエイのパーティは果たして成功したのだろうか。クラリツサのパーティのクライマックスは、彼女が総理大臣をエスコートする場面である。彼女は人々の視線を浴びて「束の間の陶酔を感じ」

ながらも、「この勝利は・・・見せかけであり、空しさを孕んでいる。腕を伸ばせば届く距離にありながら、しかし中心には達していない。」(MD 155)と思う。人々を結び合わせなにかを創り出す才能を自分の中に見出すクラリツサだが、ラムゼイ夫人のような確信に満ちた満足感を手に入れることはないのである。

では両者の違いはどこから来るのだろうか。まずその規模や趣旨の違いは明白である。クラリツサ・ダロウエイのパーティは、次々に到着する客の名前が称号や肩書と共にアナウンスされる、極めてフォーマルなパーティであるが、ラムゼイ夫人のディナー・パーティは家族と友人たちとの少数数の格式ばらない集まりである。Kaitiの指摘にもある通り、参会者の交流がなされるかどうかは、何より、その人数に影響されるところが大きいだろう。しかしもう一つ注目したいのは、クラリツサ・ダロウエイのパーティが第一次世界大戦後のパーティであるのに対し、ラムゼイ夫人のパーティは大戦前に開かれたディナー・パーティであるということである。ここで、ウルフがエッセイ『自分だけの部屋』で大戦前と大戦後の二つのパーティを描き、両者の違いに言及していることを思いだしてもよい

だろう。⁽⁷⁾ 第一次世界大戦は多くの死をもたらしたばかりでなく、人々の信念を突き崩し、彼らの価値観を大きく揺さぶった。ラムゼイ夫人とクラリッサのパーティの差異は、そのような戦前と戦後の価値観、生き方の変化を表しているのではなからうか。その変化はもちろん、文学や文化におけるモダニズムの興隆とも呼応しており、クラリッサがパーティによる死の克服を確信できないところにはモダニスト共通の心性が顕れていると言えよう。一方、ラムゼイ夫人のパーティは、Steve Ellisをはじめ多くの批評家が指摘するように、イギリスの古き良き時代を象徴する。⁽⁸⁾ ラムゼイ夫人が、ヴィクトリア朝時代を生きたウルフの母をモデルとしていることはよく知られている。それに対して、ラムゼイ家の滞在客であり、パーティの参会者でもある画家リリー、夫人に憧憬と反発とのアンビバレントな感情を抱く次世代の芸術家にこそ、ウルフのモダニストとしての視線が重ねられているのである。

4. シェリダン家のガーデン・パーティ

— 生と死

ヴァージニア・ウルフとも交流があったキャサリン・マ

ンスフィールドは、ニュージールランド生まれの短編小説家である。イギリスで作家活動を行ったことから、イギリス作家として位置付けられているが、彼女の作品の舞台は、仲の良かった弟を戦争で失うという出来事の後、弟と過ごしたニュージールランドに置かれるようになった。

「園遊会」はニュージールランドの中産階級の家庭での、ガーデン・パーティの日の朝から夕方までを描いている。シェリダン家の三人の娘たちは、ガーデン・パーティの準備を母から任され、張り切っている。その準備の最中に、末娘のローラは、使用人たちの噂話から、近くの貧しい家の若い荷馬車屋が事故で亡くなったことを知る。ローラはパーティの中止を提案するが、母や姉に取り合ってもらえず、パーティは開かれる。パーティの後、ローラは母の使いで、残り物を詰めたバスケットを死者の家に届ける。

この粗筋からわかるように、「園遊会」は、パーティの日の一日を描いている点、さらに「死」がモチーフとされている点で、ウルフの『ダロウェイ夫人』とよく似ている。「死」のニュースがもたらされるのが、後者ではパーティの最中であるのに対して、前者では準備の段階であるという違いはあるが、人が死んだと娘から聞かされたシェ

リダン夫人が「まさかうちの庭じゃないでしょうね？」
（“The Garden Party” 494）⁹⁾と驚いて問う時点で、パーティ
と「死」との相容れなさが浮き彫りにされる。それを念頭
に置くならば、実際のパーティの次の描写に「生」と
「死」の対立を読み込むことも可能である。

彼らは、シェリダン家の庭に今日の午後だけ降りてき
た、華やかな鳥のようだった、途中の道以上に——だ
が、行く先はどこだろう？ああ、みんな楽しそうに、
手を握り合い、頬をつけあい、眼と眼で微笑み合う
人々と一緒にいることはなんてうれしいことだろう。

（495-6）

この引用の後半部は、先ほどまでの心配を忘れて人々との
交流に喜びを感じるローラの意識を表しているが、前半部
は彼女の意識を超えた、いわば作品全体を支配する語り手
の意識の表白と考えて良い。その描写において、「華やか
な鳥」とは言うまでもなく、美しく着飾ったパーティの参
会者である。その鳥たちが旅の途中で、「今日の午後だけ」
降りてきたシェリダン家の庭のパーティは、人生という旅

の途中に設けられた特別な時間・空間であると考えることが
ができる。参加者は人生の旅をしばし中断し、いつもとは
違う華やかな衣装を身につけて、他者との交流を楽しむの
だ。だが、「鳥たち」の旅の行く先はどこなのだろうか
（“on the way to - where?”）。人生の旅の先にいったい何が
あるのか、誰にもわからないが、そこにいつも「死」が潜
んでいることが、シェリダン家に舞い込んだ若い荷馬車屋
の死のニュースによって暗示されている。このように考え
るならば、シェリダン家のパーティも、クラリッサ・ダロ
ウェイのパーティに似て、「死」と背中合わせの人生の中
で、ひと時「生」の喜びに浸る場を提供するものと考えて
もよいだろう。

ここで暗示された生と死の対立というモチーフは、作品
の結末部、ローラがパーティの興奮も冷めやらぬ間に、華
やかなドレスと帽子を身につけたまま、死者の家を訪問す
る場面ではつきりと提示される。ローラが身にまとうパー
ティの華やぎと生の輝きは、眠るように横たわる死者の静
寂とはあまりに対照的である。死者を前にしたローラの、
恐らく言葉にならない思いが、語り手によって次のように
語られる。

ガーデン・パーティや、バスケットや、レースを付けたフロックなど、彼に何の意味があるか？そういうものすべてから、遠く離れているのだ。彼は素晴らしい、美しい。(中略)すべてはよし、とその眠っている顔が言っている。これは当然のことだ、私は満足している、と。(498-9)

ローラは高くむせび泣き、「私の帽子、失礼をお許しください。」と言う。清廉な死者の顔に大きな衝撃を覚えたローラは、途中まで迎えに来た兄に対して自分の気持ちを伝えようと「*Just Life*」(「人生って」)と言いかけるのだが、まだ若い彼女はその先を言葉にすることはできない。ここには、紛れもなく、生を象徴するものとしてのパーティと、それに対立する死という構図が見いだされる。

マンズフィールドは手紙の中で、この作品を通して「人生の多様さ、いかに私たちが死を含めてすべてを調和させようとするか」を伝えようとしたのであり、ローラは「まずひとつのことが起こり、次に別なことが起こる」ものと思っているが、「人生はそのようなものではない」のだと述べている(Mansfield, *The Collected Letters* vol.5 101)。

ここには生と死の関係が暗示され、クラリッサの「一日だつて生きていくのは、ほんとうに、とても危険なことだ」(MID 9)という言葉と響き合う認識が隠されている。

もともと、Angela Smithが指摘するように、この作品において「設定と階級意識の結びつき」が極めて重要であること(Smith 91)も、見逃してはならない。階級の問題は、冒頭で天幕を張るためにやってきた男たちにローラが接する場面で、また、結末部ではシエリダン家のガーデン・パーティが開かれた華やかな庭と、暗い小路のみすばらしい死者の家との対照によって提示される。それは、階級の差異を無効にする死、死から照射される生と共に、ローラの中で論理を超えた体験として消化され、彼女のイニシエーションをもたらすものとなっている。

5. 結び

ヨーロッパには長い社交の歴史がある。型から始まった礼節は、やがて内面化されて精神性を帯び、市民社会の規範となっていく。このことが示すように、社交は生活に潤いを与える単なる余剰物ではなく、人々の精神のあり方や社会生活と深く結びついたものである。このような社

交は、古くからヨーロッパの文学において、物語の背景あるいはモチーフとなつて繰り返し描かれてきた。古代ギリシャの詩人ホーマーからイギリス最古の英雄叙事詩『ベオウルフ』、ルネッサンスの劇作家シェイクスピアを経て20世紀の作家ジョイス、ウルフ、カミュに至るまで、多くの作家、作品が社交を扱っている。¹⁰⁾

本稿ではウルフの二つの小説とマンスフィールドの短編を一つ取り上げて、それらが描くパーティについて考えてきた。それらの作品において、パーティは日常から切り取られた生の表象であつた。ウルフとマンスフィールドは、そこに敢えて死を対置することで、パーティが生に潜む死の存在を無にする試みであることを示した。あるいは、パーティが象徴する生の輝きを、そのような死の提示によって照射したと言つてもよい。そして、ここで忘れてはならないのは、彼女たちが描くパーティを作り上げ、成功に導いたのが、作品のヒロインたち、クラリッサ・ダロウェイ、ラムゼイ夫人、そしてシェリダン夫人と三人の娘であることである。すなわち、ウルフとマンスフィールドが描いたパーティは、人々の心の交流を通して死を克服するための試みであり、また生の喜びを体感する手段だったので

あり、それを担つたのは、人々を結びつける才を身につけた女性たち、クラリッサ・ダロウェイをはじめとする有能なホステスたちであつたのである。

(1) 注

『ダロウェイ夫人』におけるウルフの死生観については、石川玲子「ヴァージニア・ウルフが描いた「生」のかたち——クラリッサ・ダロウェイの死生観から——」〔研究年報〕第2号所収、12—24頁）も参照のこと。

(2) 『灯台へ』におけるパーティについては、石川玲子「『灯台へ』のパーティ——社交・芸術・女性のつながり」〔ヴァージニア・ウルフ研究〕第28号所収、1—20頁）も参照のこと。

(3) 以下、『ダロウェイ夫人 (Mrs. Dalloway)』の引用頁の記載に際してはMDと表記して頁数を記す。ただし、本作品からの引用と明らかにわかる箇所については、頁数のみを記す。なお日本語訳は丹治愛訳を参照させていただいた。

(4) Christopher Ames, *The Life of the Party*, pp.33-124.

(5) この日記の記述の背景として、ひとつには、ウルフが多感な時代に母を失い、またその後も兄と義姉を若くに亡くしたという経緯と、彼女自身が神経症を患っていたという個人的な事情がある。

(6) 以下、『灯台へ (To the Lighthouse)』の引用頁の記載に際

しては「LH」と表記して頁数を記す。ただし、本作品からの引用と明らかにわかる箇所については、頁数のみを記す。

なお、日本語訳は御輿哲也訳を参照させていただいた。

- (7) 石川玲子『「灯台へ」のパーティー——社交・芸術・女性の「つながり」』11頁。
 - (8) Steve Ellis, *Virginia Woolf and the Victorians*, pp.78-109. 以下、「園遊会(“The Garden Party”)」からの引用と明らかにわかる箇所については、頁数のみを記す。なお日本語訳は安藤一郎訳を参照させていただいた。
 - (10) James A. W. Hefleman の *Hospitality and Treachery in Western Literature* (2014) は西洋文学の社交における歓待と裏切りのきわどいせめぎ合いを広く論じており、そこに取り上げられた作品の時代やジャンルの広範々を見れば、社交が西洋文学史において重要なテーマの一つであったことを認識させられる。
- 引用文献
- Ames, Christopher. *The Life of the Party : Festive Vision in Modern Fiction*. Athens & London : The University of Georgia Press, 2010.
- Ellis, Steve. *Virginia Woolf and the Victorians*. Cambridge : Cambridge University Press, 2007.
- Hefleman, James A. W. *Hospitality and Treachery in Western Lit-*

erature. New Haven & London : Yale University Press, 2014.

Kant, Immanuel. *Anthropology from a Pragmatic Point of View*. Trans. and ed. Robert B. Louden. Cambridge : Cambridge University Press, 2009.

Mansfield, Katherine. *The Collected Letters of Katherine Mansfield* vol.5. Ed. Vincent O'Sullivan and Margaret Scott. Oxford : Oxford University Press, 2008.

———. *The Stories of Katherine Mansfield*. Ed. Antony Alpers. Oxford : Oxford University Press, 1984.

McLoughlin, Kate, ed. *The Modernist Party*. Edinburgh : Edinburgh University Press, 2013.

McNichol, Stella, "Introduction." *Virginia Woolf, Mrs Dalloway's Party : A Short Story Sequence by Virginia Woolf*. London : The Hogarth Press, 1978.

Smith, Angela. "Katherine Mansfield's Party Stories." Ed. Kate McLoughlin. Edinburgh : Edinburgh University Press, 2013.

Woolf, Virginia. *The Diary of Virginia Woolf* vol.2 : 1920-24. Ed. Anne Olivier Bell. London : Penguin Books Ltd., 1981.

———. *Mrs Dalloway*. London : Granada Publishing Ltd., 1976.

———. *Mrs Dalloway's Party : A Short Story Sequence by Virginia Woolf*. Ed. Stella McNichol. London : The Hogarth Press, 1978.

———. *To the Lighthouse*. London : Granada Publishing Ltd., 1977.

- 石川玲子「『灯台へ』のパーティ——社交・芸術・女性のつながり」『ヴァージニア・ウルフ研究』第28号 日本ヴァージニア・ウルフ協会 2011年。
- 「ヴァージニア・ウルフが描いた「生」のかたち——クラリッサ・ダロウエイの死生観から」『研究年報』第2号 相愛大学人文科学研究所 2008年。
- イマヌエル・カント『カント全集(15) 人間学』渋谷治美・高橋克也訳 岩波書店 2003年。
- キャサリン・マンズフィールド『マンズフィールド短編集』安藤一郎訳 新潮社 1989年。
- 呉谷充利編『志賀直哉旧居の復元』学校法人奈良学園 2009年。
- ヴァージニア・ウルフ『ダロウエイ夫人』丹治愛訳 集英社 2007年。
- ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』御輿哲也訳 岩波書店 2004年。
- 山崎正和『社交する人間——ホモ・ソシアピリス』中公文庫 2006年。